

小中学校特別支援学級における学生ボランティアの活用(3)

—3年間の実践の総括と単位化について—

○今野邦彦

(藤女子大学人間生活学部)

KEY WORDS: 特別支援学級 学生ボランティア

はじめに

藤女子大学人間生活学部保育学科(以下、本学科とする)では、2014年度から石狩市の小中学校特別支援学級の協力を仰ぎ、ボランティア活動を推進している。

筆者はこれまでの活動を振り返り、派遣先の学校の教員から見た成果として、児童生徒の遊び・集団参加の促進、授業態度・情緒の安定といった回答や、「ボランティア学生が学級に入ることにより、普段よりもきめ細かい対応や指導ができる」などのコメントを得た。一方、小中学校の教員からは「ボランティア活動中や行き帰りの事故が心配」という声や、打ち合わせ・連携などの体制整備、人員配置に関する課題も挙げられた。また学生側から見て、特別支援学級の教育内容の理解や児童・教員との関わりにおける成果や、児童生徒との関わりにおける悩み、交通手段・交通費の保障などの課題があることを明らかにした。さらに、大学の年度による時間割変更等により、ボランティア活動に参加可能な学生数が年によって増減するという事情に鑑み、ボランティア活動を単位化する可能性を示唆した。

そこで本稿では、本学科での特別支援学級ボランティア活動の3年間の総括を行うとともに、単位化について考察することを目的とする。

特別支援学級学生ボランティア3年間の総括

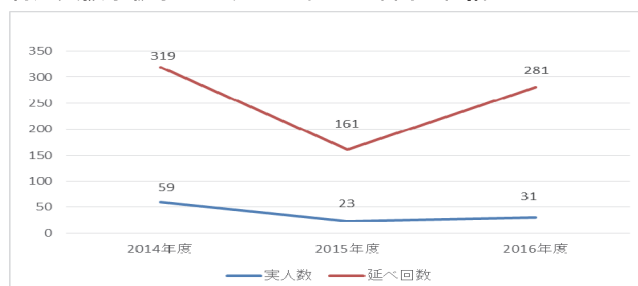


図1 ボランティアの実人数・延べ回数の推移

3年間のボランティア参加者数の推移は図1のとおりであった。2015年度はボランティア参加学生が59名から23名へと大幅に減少したが、2016年度からこの活動を「単位認定対象ボランティア」として位置づけ単位取得を可能にしたところ、参加者数は回復傾向を示した。

ボランティア活動内容(複数回答)	延べ回数 割合(%)	
		延べ回数
教員が授業を進める際の補助	629	38.6
休み時間などの遊び相手	499	30.7
安全確保のための見守り	192	11.8
生活面での支援	123	7.6
行事支援	57	3.6
車いす、移動などの介護	37	2.3
放課後支援	2	0.1
その他	89	5.5
計	1628	

活動内容を文部科学省の事例集を参考に分類したのが表1である。「教員が授業を進める際の補助」が4割、「休み時間などの遊び相手」が3割を占め、以下「安全確保のための見守り」「生活面での支援」「行事(練習を含む)支援」「車いす、移動などの介護」が続いた。

単位履修に関する学生への調査

特別支援学級ボランティア活動に参加した学生のうち、単位履修をした学生と、しなかった学生の意識の違いを明らかにすることを目的に、質問紙調査を実施した。

その結果、今回のボランティア活動により単位取得をした学生は15名であり、その全員が単位履修をして「よかった」と答えている。その理由の中で最も特徴的なことは、計画書や最終レポートの提出により活動の目標や結果を強く意識できたことや、責任感・自覚を持って活動に臨めたということであろう。

一方、単位履修登録をしなかった学生の回答には、「単位取得を目的としてボランティアをしているわけではない」「レポート提出が大変」といった本人の動機づけに関わる理由もあったが、授業時間割、履修登録の上限の制限などを理由に登録しなかった学生も見られた。また単位履修の義務付けについては、肯定的な回答だけではなく、否定的な意見も見られた。

単位履修に関する受け入れ校への調査

学生ボランティア派遣先の学校における、ボランティア参加学生の単位取得の義務付けについての意向を探ることを目的に質問紙調査を行った。

この調査では、単位化の賛否については一定の傾向は見られず、その理由も様々であった。一般的に単位化は学生の意欲・責任感の向上につながると考えられるが、逆の場合も考えられることや、学校側の負担増になる懸念も示され、課題が提示されることとなった。

まとめと今後の課題

森下は、ボランティア事業の単位化が、学校現場のニーズに沿った活動形態を見直す契機になると述べている。すなわち、「学校支援ボランティア」は、活動の自主性や自由度が高く、学校現場に対する短期的な支援に適しており、「学校インターンシップ」は活動の質や量が一定以上確保され、子どもたちの授業中の学習支援や生活支援といった中長期的な支援に適しており、「サービスマン」は、サービスを提供する側とされる側の互恵関係が組織化されるため、学校現場のニーズに沿った活動と学生の求める学習経験を可能にするものである。

本学科における特別支援学級ボランティア活動は今後、「学校インターンシップ」または「サービスマン」という視点を持って取り組む必要があると考えられる。そのためには、受け入れ校や教育委員会、また本学の他学科で行われているボランティア活動との連絡・協議・調整が必要になり、このような組織的な取り組みが実現することにより、学生、学校(児童生徒、教職員)、大学のいずれにとっても有効な活動の保障につながると考えられる。

(文献)

今野邦彦(2017): 特別支援学級における学生ボランティア導入に関する調査研究(3), 藤女子大学 QOL 研究所紀要(12).

森下覚(2015): 大学と教育委員会による学校インターンシップの構築と変遷, 大分大学教育福祉科学部研究紀要(37).

(KONNO Kunihiro)